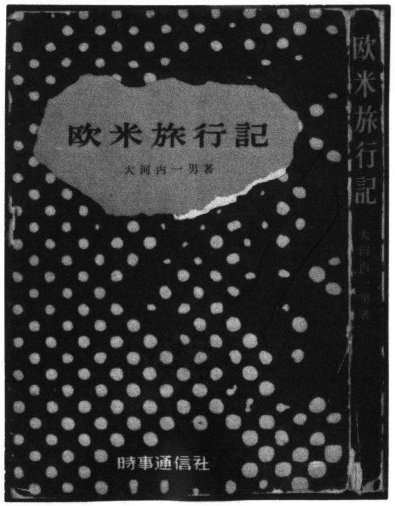
大河内一男（おおこうち かずお）経済學者。明治三十八年一月二十九日東京生れ、昭和五十九年八月九日歿（一九〇五―八四）。父は講談作家大河内翠山。昭和四年東京帝國大學經濟學部卒。二十年同大教授、三十八年東大總長も、四十二年大學紛爭により辭任。四十八年社會保障制度審議會會長、五十八年社會經濟國民會議議長。經濟學博士。

著書『概觀明治史』（合著・日本放送協會編、昭和十六年二月二十五日日本放送出版協會「ラヂオ新書」）、『國民生活の課題』（編、昭和十八年八月二十一日日本評論社）、『再建の指標』（合著・東京帝國大學新聞社編、昭和二十一年十月二十日勤労學徒後援會「學徒叢書」）、『經濟學の將來』（合著・東京經濟研究所編、昭和二十一年十一月十五日廣文社）、『學問と現實―新しい社會科學の出發のために』（合著、昭和二十二年四月二十五日東京帝國大學協同組合出版部編刊）、『戰後經濟學の課題・一』（合著、昭和二十二年九月二十五日有斐閣「經濟學選書」）、『革命―理論・史論』（合著・二十世紀研究所編、昭和二十四年五月二十日思索社）、『現代文明の批判』（合著・思想の科學研究會編、昭和二十四年六月十五日アカデメイア・プレス「思想の科學研究會選書」）、『知識人の探求―新らしい立場と方向』（合著、昭和二十四年七月二十日河出書房）、『學生と社會』（清水幾太郎共編、昭和二十五年八月二十日日本評論社「學生シリーズ」）、『抵抗の學窓生活』（合著、昭和二十六年九月二十日要書房）、『現代日本の考察』（合著・永田清編、昭和二十六年十一月十五日慶友社）、『學生生活』（清水幾太郎共編、昭和二十七年五月二十五日新

評論社）、『黎明期の日本労働運動』（昭和二十七年十月二十日岩波書店「岩波新書」）、『危機はここまで来ている』（合著・吉野源三郎編、昭和二十九年二月二十日厚文社）、『欧米旅行記』（昭和三十年九月十日時事通信社）、『戦後日本の労働運動』（昭和三十年九月二十日、改訂版・三十六年六月二十日岩波書店「岩波新書」）、『労働運動』（編、昭和三十一年五月二十四日岩波書店「岩波小辞典」）、『貧乏物語』（昭和三十四年十月一日文藝春秋新社、再刊・三十九年四月二十日「ポケット文春」）、『社会主義日本の設計』（合著・社会主義政策研究会編、昭和三十五年一月二十五日至誠堂「現代人叢書」）、『日本的中産階級』（昭和三十五年十一月二十日文藝春秋新社）、『日本労働組合物語・明治』（松尾洋共著、昭和四十年四月二十日筑摩書房）、『自分で考える』（昭和四十一年十月二十四日講談社「思想との対話」）、『暗い谷間の労働運動―大正・昭和（戦前）』（昭和四十五年十一月二十一日岩波書店「岩波新書」）等。